

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

ホームページ <http://shakaisushin.cool.coocan.jp/>

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

e-mail: shakaisushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル幡ヶ谷九〇四 電話/FAX(03)32299153・67  
振替 0010019158431 労金 中央労金本店 No.1154163

購読料 月額 (郵送) 350円・メール 175円

6カ月前納制

## 〈もくじ〉

### ■巻頭言■

生産性三原則に思想的反撃を

一六春闘への基本的視点

滝野 忠……………2

私たちはどんな時代に生きているのか

松枝 佳宏……………3

現代国家の政治と経済政策への基本的視点

中澤 秀行……………4

— 安保法制、原発再稼働、TPP、税制等で考える —

「息子への手紙」

稲村 守……………8

— 高浜原発再稼働を許さない闘いから —

政官財で国民をくいもの

山下 けいき……………10

— マイナンバーは国がつけた奴隷番号 —

「旬刊社会通信」ホームページのご案内……………12

読者からのおたより……………12

# 旬刊 社会通信

NO. 1210

二〇一六年二月一五日号

二〇一六年二月一五日発行  
(毎月一日・一五日二回発行)

## 生産性三原則に思想的反撃を

## 一 六春闘への基本的視点

生産性向上に協力し、労働者の生活向上をはかるとする生産性三原則にもとづく春闘（労働条件闘争、総合労働条件改善闘争）は、どのように構想されるか。U Aゼンセンは「成長の成果を労働者に配分」、『連合白書』は「付加価値の適正配分」「分配すべきパイの拡大が極めて限られる時代」という。

ならば問う、「成長の成果」がない時、労働者への配分を我慢せよ、賃金・労働条件低下に甘んじよ、餓死もやむを得ないというのか。

「分配すべきパイ（成長の成果）が極めて限られる」というのが、それは本当か。「付加価値」「適正配分」とはなんぞや。「パイ」をつくるのはだれか、労働者だ。労働者もつ労働力という商品がつくる。労働力の価値である賃金の超過分が、資本家どものいう付加価値、われわれがいう剰余価値となる。「分配すべきパイの極めて限られる時代」だって！ ウソ、現実の冒とく、改ざん、歪曲だ。連合は天文学的に積み上がった内部留保金（GDPの七〇%強にもなる三五〇兆円）を批判し、労働者に還元せよといっているではないか。「分配すべきパイ」は増えに増えている。労働者に分配されない。なぜか。

東京新聞（一月二四日付社説）は「なぜ賃金は上がらない」を解説する。その解説はなんともややこしい。「経営者が強欲だからなのか。話はそう単純ではありません。企業規模や業態ごとに丁寧な分析すべき」（安倍政権は）賃金の底上げや中間層拡大のための再分配政策、賃上げのできる環境整備に重心を置くべき」。さらに、連合の新方針―東京新聞夕刊の「紙つぶて」執筆者に昨年から連合事務局長・神津氏（現会長）を起用したからか―を「政労使会議から排除されたことで労働者側は今春闘で独自性を打ちだしている。それが『大手の賃上げ要求は抑え、中小下請けの賃金を底上げする格差是正』です。」と最大限にもち上げる。

論説子は連合運動の二十有余年の歴史についてなにも知らないことを告白していらつしやる。「底上げ・底支え」「格差是正」は、生産性三原則にもとづく運動路線ということをである。

「なぜ賃金は上がらない」か。理由は単純、明快。連合が賃上げ要求をしないから。論説子殿、連合は一九九九年以降、要求はほぼベア・ゼロ、ご存じのはず。賃上げ闘争は資本と賃労働の戦いだ。要求ナンボで本当の戦になる。要求ゼロ―それどころか定昇をベアⅡ賃上げとしたり、それじや経営者は連合相手にせずは当然のこと。

「パイ」は労働者が想像を絶するほどにつくり出している。それが三百五十兆円、あるいは五百四十三兆円、二〇一五年一年間の増加分二十三兆円といわれている内部留保金（企業剰余金）である。このように企業は儲けている。にもかかわらず、連合は要求しない。なぜ要求しないのか。

『連合白書』は生産性三原則にもとづく生産性向上について「われわれの生産性運動は、企業の存続と雇用の安定に向けた取り組み」と歌舞伎役者よろしく見得を切っ

て見せている。労働者はいつまでも企業の下僕であれに他ならぬ。ここに、連合労働運動の本質がある。(滝野 忠)

## 私たちはどんな時代に生きているのか

大変な時代である。この原稿を書き始めたとき、北朝鮮の「水爆実験」の報が飛び込んできた。中東の混乱の激化とともに世界中に広がるテロ・反テロ戦争、大量の難民欧州流入、ウクライナ情勢、きな臭い南シナ海の覇権争い……、世界中が揺れ動いている。「新しい戦争の時代」の到来なのであるか。

この情勢を利用して、安倍政権は戦争法である安全保障関連の法整備を断行し、米軍と一体となった日常的な軍事共同訓練など戦争前夜の様相である。若き自衛隊員が殺し・殺される事態がいつ、どこで起こっても不思議ではない。

だがどっこい、平和憲法は生きている。だからこそ安倍は憲法に緊急事態条項を創設すべくキャンペーンを始めた。国民の反対が根強い9条改憲を迂回し、緊迫する世界情勢を利用し、「国民の生命と安全を守る」ため、夏の参院選の争点にすると居直る。私たちはこの動きを許すわけにはいかない。「私たちの候補者」をつくり出し、「みんな」で闘うのだ。あまりにも前のめりの安倍政権の動向に、国民の反撃もある。

昨年、全国津々浦々で戦争法反対の国民的運動が展開された。今年の年明け、一月四日の国会開会と同時に再開された。これらの動きを強くし、参院選闘争に結実させるのだ。安倍政権に一矢報いようではないか。

## 中・長期的な視点でのどっしりとした構えを

官邸を軸に、衆参同時選挙も囁かれている。情勢は不透明で、何が起こっても不思議ではない。「戦後歴史」の転換期である。中曽根は「戦後政治の総決算」を謳い、社会党・総評ブロックをつぶした。それから約二十年、途中小民主党政権はあったが、その裏切りもあって、今や反対(野党)勢力が弱くなり、安倍の「戦後レジームからの脱却」が進む。戦後憲法体制の総破壊である。

だが、参院選は「一人区」でも安倍与党に対する野党統一候補の擁立は進んでいない。それどころか、関西では「おおさか維新の会」の動きに戦々恐々で、衆参同時選挙になれば、橋下徹自身が立候補し、安倍と手を結んだ改憲勢力の台頭が危惧されているのである。

局面を打開する「うまい手」があるわけではない。この困難な状況を突破するのは「大衆の力」しかない。また「大衆の力」に依拠するしか選挙の勝利もないのである。参院選を闘うためにも、逆に中・長期的な視点に立ったどっしりした構えが求められているのだ。私は、労働運動の再生・強化を軸にした大衆運動の強化しかないと考えている。参院選(その準備も含めて)を機にその第一歩を踏み出すのである。

## 資本主義の断末魔の危機の中の闘い

私は、極端すぎるかもしれないが、「資本主義が断末魔の危機を迎えている」と言ってきた。だからこそ、支配層は必死に「強い経済」の復活を求め、それを支える「強

い国家」を目指しているのである。内田樹・神戸女学院名誉教授が〈私たちはどのような時代に生きているのか〉という問いかけに面白いことを言っている。少し長い引用する。

「移行期です。地殻変動的な移行期の混乱の中にある。グローバル資本主義はもう限界にきています。右肩上がりの成長はもう無理です。収奪すべき植民地も第三世界ももうないからです。投資すべき先がない。だから、自国民を収奪の対象とするようになった。貧者から吸い上げたものを富裕層に付け替え、あたかも成長しているかのような幻想を見せているだけです」「若い人の賃金は下がり、法人税を下げ、株の配当を増やす。株をやっている人から見れば、本来ならば社会福祉や教育や医療に使うべき税金を株の配当金に充ててもらっているわけですから、こんなありがたい政権はない」(『朝日新聞』一月五日)。

新自由主義は資本主義の先祖返りと言われ、「規制改革」の名のもとに資本主義の勃興期の労働者状態が再現されている。しかも勃興期であればまだ「未来」があった。しかし、今日、派遣をはじめ非正規労働者に未来はあるのだろうか。アベノミクス第二弾は「一億総活躍社会」を打ち出したが、その実は「老人から女・こどもまで一億総収奪・搾取社会」ではないのか。また、「GDP600兆円達成」の一つに経済の軍事化がある。防衛省装備庁が発足したが、国を挙げての武器の調査研究、そして輸出、「戦争ほどもうかる商売はない」のである。ローガン(デマゴギー)で動員する姿にワイマール憲法下のナチスの台頭を見るのは考えすぎであらうか。

破壊される労働・生活……。そのような中で「9プラス25、憲法改悪阻止」の闘いが求められている。そして、実際多くの闘いが闘われている。困い込むのではなく、手をつなぐのである。その中から「私たちの候補者」は生まれ、「みんな」の闘いになる。それが近い将来の「9プラス25、憲法改悪阻止の共同戦線(仮称)」へ結実していくと確信するのである。今こそ燃えるような議論を期待する。

(松枝 佳宏、『新社会兵庫』No.四六四 二〇一六年一月二六日発行より)

## 現代国家の政治と経済政策への基本的視点

— 安保法制、原発再稼働、TPP、税制等で考える —

### 大内兵衛先生の教える「物事の判断基準」

八幡大学教授伏下哲夫氏の「大内先生に学ぶ」という興味深い文章があります。『大内兵衛著作集第一〇巻』(岩波書店)の月報(一九七五年九月)に収録されているものです。伏下氏は戦前、東京帝国大学経済学部で大内兵衛先生の演習に参加し、一緒に参加した仲間です。特に記憶に残っている人の一人として、戦後東大教授となった鈴木鴻一郎氏を挙げています。

ご案内のように、鈴木鴻一郎氏は向坂逸郎先生が戦後岩波文庫に『資本論』を翻訳した時に協力された方の一人で、その時の様子を「逗子の一週間 向坂逸郎訳『資本論』(岩波文庫)の想いで」(『一途の人 東大の経済学者たち』新評論刊所収)という一文で残されています。また、向坂先生も『資本論』岩波文庫旧訳第一分冊の「訳

者あとがき」でこれに触れられています。

さて、伏下氏の「大内先生に学ぶ」で、興味深い箇所を紹介させていただきます。「この二年間の演習で私が先生から教えられたことは数多くあるが、特に物の考え方について先生から次のようなご注意を受けたことがあります。」と言うのです。それは、「物を考えるのに最初からイデオロギーの物差しで計ってはならない、先ず事実を具體的につかむことだ、そのためにはそれによって得るのは誰か、誰が損をするのかという風に考えて行くことだ。」と。そして次のように続いています。

「今から考えると至極当然のことであったが当時の私は何とかして早くマルクスの理論を身につけたいと焦っていたので、先生の眼には私がマルクス理論に固執して事実をもゆがめかねないように映ったのではないかと思われる。兎も角私としては当時このご忠言に深く感銘し、これがその後の私の物の考え方の指針となった。」という訳です。

ちなみにマルクスは『資本論』第一巻の第一版序文で「経済学の取り扱う素材の特有の性質は、もともと狭量な所してもっとも憎悪にみちた人間胸奥の激情である、私利という復讐の女神を挑発する。」(岩波文庫版第一分冊 一七頁)と述べています。マルクスの理論というか思想、或はその論理の組み立て方は公平ですから、「科学」と言うにふさわしいのだと考えています。そして、この一文の前段では次のように述べます。「起りうる誤解を避けるために一言しておく。私は、資本家や土地所有者の姿を決してバラ色の光で描いていない。しかしながら、ここでは、個人は、経済的範疇の人格化であり、一定の階級関係と階級利害の担い手である限りにおいてのみ、問題となるのである。私の立場は、経済的な社会構造の発展を自然史的過程として理解しようとするものであって、決して個人を社会的諸関係に責任あるものとしようとするのではない。個人は、主観的にはどんな諸関係を超越していると考えていても、社会的には畢竟その造出物にほかならないからである。」(岩波文庫 第一分冊 一六頁)

そして『資本論』を帝国主義の時代に理解するために必要となってくるレーニンの『資本主義の最高の段階としての帝国主義』ですが、ここでもレーニンは同じように述べています。

「ここで問題なのは、ドイツのブルジョアジーではなく、全世界のブルジョアジーであることはいままでもない。資本家たちが世界を分割するのは、かれらの特殊の悪意からではなくて、集積の到達した段階が、利潤を獲得するためには、彼らをしていやおうなしにこの道をとらせるからである。そのさい、彼らは世界を「資本に忠じて」、「力に忠じて」分割する。…商品生産と資本主義との体制のもとでは、これ以外の分割方法はあり得ないのである。」(『帝国主義』岩波文庫 一二四頁)

こう考える訳ですから、マルクスは資本家も労働者と同じように「疎外」されていると考えています。「有産階級とプロレタリアートの階級は、同一の人間の自己疎外をあらわしている。」(マルクス・エンゲルス『聖家族』、岩波文庫版 六二頁)という訳です。が、続けて次のようにも述べます。「だが、前者の階級は、この自己疎外のうちにあつて、快適と安固を感じており、この疎外がかれみずからの力であること

を知っており、また疎外のうちに人間的存在の外見をもっている。後者はこの疎外のうちにあつて廃棄されたと感じ、そのうちにかれの無力と非人間的存在の現実性をみとめている。」と。

### 「日本」という「資本制（主義）国家」

昨年（二〇一五年）に入ってから日本の二分すると言っても良い大論争は、①原発再稼働、②武器輸出、③安保法制、④TPP、⑤消費税増税・法人税減税等々と言えます。政府与党自民党・公明党と野党との国会での論争、国会周辺だけでなく、全国津々浦々での政府与党への反対行動……。

こうした問題を前述の大内兵衛先生の「物事の判断基準」で考えてみますと、政府与党の実行しようとする事柄により「得」をするのは、財界Ⅱ独占的大資本であることは明白です。

原発も武器も独占資本の製品です。柏崎原発へは反対の抗議行動（自治労は「北信越」がブロックとなっていて、長野は隣の新潟県での原発運動と共闘していました。）へ何回も行った経験がありますが、当時、柏崎で原発という鉄やセメントや電気製品にコンピュータ等の塊を一基作るのに、五千億円と言われていました。

過剰生産状態に喘ぐ鉄・セメント等の独占資本の生産物を大量に消費できるという訳でした。安保法制は自衛隊という名の軍隊の増強に拍車をかけるのですが、その頃、富士山のすそ野で自衛隊が一日演習をすると、戦車の燃料費や砲弾等々で消費する物資は金額にして五千万円と報道されたことがありました。戦車の燃費は、一リッターで三百メートルしか走らないと言うことで、燃料の消費量は驚きの数字でした。

消費税増税・法人税減税に至っては一目瞭然でしょう。『宣言』には「労働者革命の第一歩は、プロレタリア階級を支配階級にまで高めること、民主主義を闘いとることである。」とし、そうした暁に先ずすべきこととして「強度の累進税」（岩波文庫、七五頁）を挙げています。

消費税こそ、累進課税に反し、弱者からの搾取（税は資本制社会に於いては追加搾取そのものです。）を強化するものでしかありません。福祉目的を口実に消費税率を上げ、一方で法人税率では財界の要望に応えるという訳です。

かつて仕事で、三菱金属鉱業のお偉いさんを訪ねたことがありました。銅の精錬をしている工場でしたが、銅の一番の消費先は当時（一九七〇年代後半）「鉄砲の薬きょう」ということでした。なんの躊躇もなく「朝鮮戦争特需や、ベトナム戦争時とはとても儲かった！」という話をしてくれました。そして「日本が戦争に巻き込まれるのは困るが、海外で戦争が勃発したり、自衛隊が大きくなって富士山の裾野で演習をしてくれると儲かる。」と言うことでした。

国家は、資本制社会（賃労働と資本という搾取関係の社会、即ち商品生産の社会）のもとでは労働者階級その他の働く階級を抑圧する機関であること、そして財界Ⅱ各独占的資本の利害の衝突を調整する機関であること、こうした事を①原発再稼働、②武器輸出、③安保法制、④TPP等々といった問題に対する政府与党の対応の中に見出すはずです。

## 「国家論」との出会い等

学生時代、「家族法」の演習で指導を受けた山島正男教授は「山島家族法」と言われる程の有名な方でした。学生にはなかなか厳しい先生で、しかし今考えると的確な指導をしてもらえたと感じています。

その指導とは「家族法」の勉強⇨解釈学をする前段として、「家族法を勉強する者が読んでおく古典」ということで三冊の本を紹介されたことです。①『古代社会』（モーガン著／岩波文庫）、②『家族・私有財産・国家の起源』（エンゲルス著／岩波文庫）、③『婦人論』（ベーベル著／岩波文庫）です。

私は、今もこれらの著作と格闘を続けている程度でして、理解の程度はまだまだでしょうが、松本市職労での運動として、一九七〇年代に全ての女性職員に育児休暇制度を導入（第一次育児法の時代は、学校・幼稚園の教諭、保育園の保母、看護婦、過疎地域特別振興法適用自治体の保健婦と言う様に、限られた職種での育児でした。）を獲得したり、公立保育園を地域の子育てセンターと位置付け、一九八〇年代に未満児保育、障害児保育、アレルギー食等々の導入をするに当たって市民を巻き込んだ保育運動を展開する時の根拠は、こうした「古典」が土台でした。

『家族・私有財産・国家の起源』の初版の序文（一八八四年）でエンゲルスは「マルクスが四十年まえに発見した唯物史観を、モーガンはアメリカで彼なりに新たに発見した」と述べるとともに、『起源』の本文の最後は『古代社会』の結論部分を引用して締めくくっています。読者の皆さんは、是非著作で勉強し確認してみてください。まさに「ブディングのよしあしは食べばわかる」（エンゲルス）と思います。

『宣言』や『空想より科学へ』を初めて日本語に訳出したのは、堺利彦です。向坂先生は学生時代にアメリカから取り寄せて読んだ『宣言』や『空想より科学へ』の事をいろんなところで述べておられますが、この二つの著作に接して堺・向坂といった大先達は、「社会主義は光に面する」と言う確信を持ったのだと思います。そして、これらの二著作にもマルクス・エンゲルスの国家論は的確に述べられています。

『宣言』には「近代的国家権力は、単に、全ブルジョア階級の共通の事務をつかさどる委員会にすぎない。」（岩波文庫、四四頁）と。

『空想より科学へ』では――

「国家というのは、そのときどきの搾取階級の組織、その生産条件を外部からの攻撃に対して維持するための組織であった、それは特に被搾取階級を、与えられている生産方法にふさわしい抑圧の諸条件（奴隸制、農奴制、又は隷農制、賃労働制）に暴力的に抑えつけておくための組織であった、国家は社会全体の公の代表者であり、全社会を総括した一つの目に見える団体であった。」

しかし、国家がそういうものであったのは、それぞれの時代に全社会を自ら代表していた階級のそれであった限りにおいてであった。たとえば、古代における奴隸所有者の国家、たとえば、中世における封建貴族の国家、そして現代のブルジョアジーのそれ。しかるに、国家がいつの日か社会全体の本当の代表者となるならば、そのとき、それは無用物となる。

抑圧すべきいかなる社会階級も存在しなくなり、階級支配と従来の生産の無政府性に立脚する個人の生存競争がなくなってしまうえば、そしてこれから生ずる衝突と逸脱がなくなってしまうえば、抑圧しなくてはならぬものはないのである。

国家が実際に社会全体の代表者として登場する最初の行為——社会の名において生産手段を没収すること——これこそは、同時に、国家が国家として行う最後の独立行為である。国家権力が社会関係に対して行ってきた干渉は、一領域から他領域へと無用の長物となり、ついには順々に眠りにつく。人間に対する統治に代わって物の管理と生産過程の支配が現れる。国家は『廃止』されるのではない、死滅するのである。(岩波文庫、八五頁〜八六頁)と。

### 「国家論」の学習のために

「国家について」というスヴェルドロフ大学でのレーニンの講演録(全集Ⅱ第29巻、『国家と革命』国民文庫版に所収)があります。

そのなかで「国家の問題は、もつとも複雑な、むずかしい、おそろくブルジョア学者や文筆家や哲学者によってももつとも混乱させられている問題のひとつだ」と述べ、「だから、短い談話によっていっぺんにこの問題を完全に明らかにすることができると、けつして期待してはならない。」と、レーニンが言うほどの「国家」です。

「国家とはなにか、国家はどのようにして発生したか、…国家にたいする態度は根本においてどういうものでなければならぬかという問題」について、この講演録は展開して行くのですが、「国家の問題については、諸君がエンゲルスの著作『家族・私有財産および国家の起源』を読むよう、私は希望する。これは、近代社会主義の基本的著作の一つであつて、その一字一句があてずっぽうに言われたものではなく、膨大な歴史のおよび政治的材料にもとづいて書かれているという信頼をもって臨むことのできる著作である。」と。ここでは、原始共産制、奴隷制、封建制、資本制(主義)、社会制(主義)という五つの社会についても展開されています。

この稿を読んでおられ読者の皆さんには、日々、食事し睡眠するように、ぜひ「古典」の読書を大切にされるよう切望するものです。(二〇一六・一・二八、中澤秀行)

## 「息子への手紙」

—高浜原発再稼働を許さない闘いから—

### 「息子への手紙」

「二〇一三年のできごと。あなたが一歳の時のお話です。

あなたが母さんのお腹にやってきてくれたおかげでね、母さんの人生に劇的な気づきの波がやってきたんだ。…学びを通してね、本当のこと、本当に大切なことは自分でよくよく調べないと分からない、世の中の常識とされていることはそうとは限らない、むしろ少数のほうに真実があるんだと母さんの中でたくさん気づきがあったんだ。それでね、その時母さんは、みんなと同じじゃなくていい！自分で正しいと思つたことを自分で考えて決めていこう！と決めたんだ。…

それでね、その学びの延長線上に「放射能のこと」があったんだ。：やつとたどり着けた：という感じ。：八月一日から滋賀県で住むことになったんだよ。母さんこの町をすっかり気に入ったよ。すれちがう人と人が「こんにちは」とあいさつを交わすあたたい町。黄金色に続く稲穂、羽広げ昇るしらさぎ、軒下につるされている玉ねぎたち……あなたの原風景にこの景色が残ること、心から幸せを感じる。夕暮れ時にあなたを自転車の補助イスに乗せ、サイクリングするのが母さん至福の時。広い田んぼの真ん中で目をつぶって深呼吸をして「どうかこの地球が愛で満たされますように」と祈る夕刻だよ。

母さん滋賀に来てからもね、出会う人みんなにどうしてお引越してきたのかお話ししてるんだよ。：」（山崎圭子さんの「息子への手紙」から）。

これを読んで深く深く感動し、「どこかで読んだ！」と思った。そうだ。あの『チエルノブイリの祈り』だと、その共通性を感じた。

「私には、なぜ人々がこれほど愛に満ちた態度で、人に接することができるのか、信じられない」と、広河隆一氏はこのベラルーシの作家の作品を「解説」する『チエルノブイリの祈り―未来の物語』岩波現代文庫)。「もともと非人間的な時間の描写で見えてくるのが、驚くべきことに人間の尊厳なのだ。リュドミラーは放射能による夫の体の崩壊を伝えたくてアレクシエービッチに話したのではない。自分がどれほど彼を愛していたか伝えたくて話したのだ。」と。

### 大雪予報をはねのけて

関西電力は福井県にある高浜原発3号機を一月二十九日午後に起動し、再稼働させる方針を原子力規制庁に伝えた。新規制基準に基づく再稼働は、九州電力川内原発1、2号機に続き2原発3基目。一月二十四日には高浜現地で全国集会が、一月二十七日には関電大阪本店包囲全国行動が展開された。いずれも実行委員会主催で、1・24は若狭を考える会が呼びかけ原発反対福井県民会議が協賛し、1・27は原発反対福井県民会議が呼び掛けた。

一月二十四日の「1・24高浜原発再稼働を許すな！ 全国集会」は、高浜町内の会場で六百人が参加し、終了後町内デモも行った。

集会に先立って高浜原発先の展望台で決起集会とデモをして、原発事務所に再稼働中止要請が行われた。福井県警の二か所の検問、臨時設置多重防護フェンスと集会参加と同じ六百人の警官に守られた高浜原発は、およそ市民の声など無視。その後の集會は「四十年ぶりの寒波。積雪一メートル」の天気予報をはねのけ、東京・兵庫・滋賀・大阪・京都・福井からのバス八台含めてたくさん仲間が集まった。

若狭の原発を考える会の橋田秀美さんときいなら原発びわこネットワークの稲村守事務局長の司会で開会された集會は、木原壯林・京都工芸繊維大学名誉教授が主催者を代表し、「再稼働をただ容認すれば、四十年越えの老朽化した原発再稼働を認め、原発新設にも道を開いてしまう。原発が人類の手におえる装置でないことは、福島の大惨事が大きな犠牲の上に教えるところだ。

琵琶湖が汚染されれば、関西の住民一四五〇万人や若狭などからの避難者の飲料水

がなくなることも考えていない。また、例え被爆をしながら避難できたとしても、故郷には二度と帰れないという危機感はない。原発は人間の意志で止められる。原発を全廃に追い込もう」と挨拶。

そして集会協賛団体の原子力発電に反対する福井県民会議の中島哲演代表を始め、鹿児島・川内、愛媛・伊方、青森・大間原発反対闘争や、福島、東京、関西各地など十三人の各地のアピールを受けた。

福島第一原発震災後に関東から滋賀県に避難し、三歳の男子を連れて滋賀のバスで参加した山崎圭子さんは、「再稼働は許せない。未来の子どもたちのために原発はもう手放して」と取材に答え、自らの手記（「息子への手紙」）を参加者に配布した。

### 関電の超官僚体質

「関電の八木社長さんは高浜原発再稼働をしないでください」と、三歳の避難者の声が響き渡った。一月二十七日夜、「1・27高浜原発再稼働を許さない！ 関電包囲全国行動」が二部構成で三時間半にわたり、七百人の参加で怒りを結集した。

北関東のホットスポットから親子三人で滋賀県に避難された、山崎圭子さんと三歳の男子が登壇し、子どものために避難をしてきた経過を報告し、原発再稼働固執は軍事目的でもあると喝破し、子どもさんも声をあげた。

実行委員会が十日前から要請したのに、関電本店は「五人に限り、マスコミ同伴お断り、五分以内」という不遜な扱いで、この日参加者の総意をこめて申入れた代表団を受付で四分待たせ、「担当の広報の代理」と称する若い社員が出てきて一回フロワ―で立ち話。五分きっかりにその社員の携帯電話が鳴る。関電の官僚的体質を象徴している対応に、登壇した申入れ報告のさいなら原発・びわこネットワークの稲村守事務局長は怒りを押し止めることができない。

そして全国行動呼びかけの原子力発電に反対する福井県民会議の中島哲演代表を始め、鹿児島・川内、愛媛・伊方原発反対闘争や、平和フォーラム関西、釜ヶ崎、関西各地などのアピールを受けた。

関西電力は高浜原発3号機を一月二十九日午後に起動し、再稼働を強行するという。主催者の木原壯林全国実行委員会代表から、最後までの高浜現地行動の提起を受け、関電本社への怒りのシュプレヒコールを行った。

（さいなら原発・びわこネットワーク 稲村 守）

## 政治家で国民をくいのもの

### ―マイナンバーは国がつけた奴隷番号―

九月議会に続いて十二月議会にもマイナンバー関連の議案が提案され、私は本会議、文教委員会でも問題点を指摘し、最終日に以下（若干の違いはあります）の反対討論を行いました。

この条例は行政手続きにおける特定の個人を識別するための番号の利用等に関する法律、いわゆるマイナンバー法の施行に伴い、個人番号の利用範囲に関する事項を定

めるものであり、マイナンバー法がなければ制定する必要は全くないものです。

九月議会で、①国が個人情報を一元管理して監視する、②個人情報が一際限なく収集され、国民のプライバシーの侵害が進んでいく、③国民の総背番号化が人を番号や数字として扱い、仕事・収入・資産等によって、人間を「値段」として見る風潮が生まれかねない。④制度導入に約三千億円、毎年の運営に三百億円から四百億円の莫大な経費がかかり、自治体へも財政負担や職員への負担を強いる、⑤ＩＴ利権の存在、⑥マイナンバーを統括する「地方公共団体情報システム機構」（ジェイリス）は総務省の天下り機関である、⑦政官財の利権構造が明らかである、⑧セキュリティの脆弱さ、⑨今の政権の情報管理に対する不信任感、⑩日本のマイナンバー・共通番号制が世界的には過去の遺物に過ぎないと指摘いたしました。『社会通信』一二〇五（二〇一五年十二月一日号参照）

マイナンバーの通知カードが各家庭に届くとともに、市民は戸惑い迷っています。仕組みがよく分からない、マイナンバーへの考えの違いから夫婦に溝が生じた、拒否したいと思っても会社から提出を求められるなどです。今議会でもマイナンバーの問題点や危険性が何人もの議員から指摘されました。

**一点目は、**総務省の見通しの甘さと傲慢さです。マイナンバーの通知カードが郵便局に到着するのが大幅に遅れ、また配達の際に受領印や署名が必要となる簡易書留郵便物であることから、配達する郵便局員に過重な負担を強いました。過労死寸前まで働くことが強制され、誤配も相次いでいます。通知カードの遅れに伴い、自治体や、市の職員にもしわ寄せが及びました。

またジェイリスが発送した通知カードのうち、未到着分は本来ジェイリスが処理すべきなのに、これを自治体に押し付け、本市（大阪府茨木市）の見込みでは全世帯の一五％、約一万八千通の処理に追われることになりました。

**二点目は**自治体が理不尽な財政負担を強いられることです。本市ではシステムの改修や構築、番号カードの交付にかかる経費など、総額で五億五千万円余りが必要となり、そのうち市負担が約三億円にも上るとの答弁がありました。

その答弁を受けて、賛成する議員からも「法定受託事務でありながら、自治体にこれだけ多くの負担を強いる制度はいかがなものか」との発言が出るほどです。

**三点目は**この制度がＩＴ利権になっていることです。この九月、総務省は顔認証システムの導入を自治体に通知しています。これは四月の自民党の会議にＮＥＣが提案したシステムがほぼそのまま採用されたもので十分な検討の跡はうかがえません。

ここ数年、繁華街に防犯カメラの設置が増えています。顔認証で個人が特定できるようにになり、カード発行の義務化、常時携帯の義務化などが進めば、国民のすべての行動が逐一記録・蓄積され、国家による国民の監視が現実化することになります。

マイナンバー事業受注の各社から自民への献金、中でも顔認証システムを開発したＮＥＣはマイナンバーで一十億円の売り上げを目標にするなど、この事業は政官財の癒着で進められています。

四点目は情報漏えい、なりすましの危険性です。堺市では有権者データ約六十八万人分の外部流出がありました。たしかにマイナンバーは過去を教訓に大幅に改善されているかもしれませんが。

しかし五重の壁により放射能は漏れないといわれた原発は地震と津波であえなく崩壊、今も放射能は誰に遠慮することもなく漏れ続けています。人間のすることには意図の有無にかかわらず、誤りは付き物であり、巨大システムほどいったん事故やミスが起これば取り返しがつかなくなることは、原発事故の教訓でもあります。早晚、情報漏えいや意図的侵入によって個人情報外部に漏出することは必至であります。

五点目はマイナンバーが民主主義に反する点です。民主主義とは国民が権力者の横暴を防ぐ立憲主義を基本にして成り立つものです。マイナンバー法はこれとは逆に民主主義を後退させ、行政権の肥大化の中で国家が国民を管理支配する道具として整えたものです。私は悪法のための条例の制定や改正は認められないとの立場から、今回の条例に反対するものです。  
(大阪府茨木市議・山下 けいき)

## ◇ 読者からの おたより ◇

雪かき 日本列島でも当地は、今の寒波でやっと冬らしくなった程度で、自宅周辺の雪かきもまだ三回です。ご自愛ください。  
(山形・東海林和夫)

編集部より 先日はお話しもできず申しわけありませんでした。  
負けぬ 再び(例年どおり)三月、四月は出向のため「通信」の配送を六・七月分に回してください。お願いします。七月には参院選で憲法を守るかの勝負になります。「決戦」ですが、二月中にやれることはやっておきます! 負けぬ!!  
(埼玉・K)

編集部より 出向、毎年たいへん。ご自愛を。七月までに、まだ何が起きるかわかりません。「やることはやっておく」。心意気に敬意です。

“革新” 野党といわれる政党に革新という言葉を求めるのは無理なのでしようか。(北海道・I) 編集部より 野党は優しい言葉を使い、与党は過激な言葉を使っています。メディアもそれを許しています。“革新”、ヨーロッパでは昔フアッシュン政党が使った言葉です。

新潟市内雪少なく長岡市では… 今回の雪は長岡を中心に短期間に降りましたが、利用者も道路管理業者も対応が後手後手だったと思います。車の利用者もそこまで悪化している理解出来なく、いつも通り押しかけ、除雪が遅れているところに車が入るのでさらに除雪が出来なくなりました。今度同じような状態になっても大丈夫でしょう。利用者も懲りていますので、行くのを自粛されるでしようし、行政も手早く対応するでしょう。ことが起きないと具体的ににならないし、また、喉元を過ぎればすぐ忘れ去られようとしています。権力者も人間も懲りない面々ですね。今回は新潟市は雪が少なく、全面的に土が出ています。  
(新潟市・小林 義昭)

編集部より 東京も先日の雪では、京王線等公共交通が混乱、利用者は駅周辺にあふれてました。四〇cmの積雪、りんごの剪定作業 先日の雪は長野県の中南信地方に倒木等で被害が出ました。滝野さんのはがきにありました水道管対策に中澤さん日参の旨もその影響でしょう。私の住む地域は大雪には慣れていますが、独居住まいもあり除雪機で玄関まで行くのも私の仕事です。

中澤さん「通信」文章、読みやすいですし、楽しませていただいています。当方一月はじめは雪が少なく一月十日からりんごの剪定作業に出ています。最近は畑に四〇cm位の積雪、しかし長靴で一步一步、はしごに乗って剪定、三月一杯まで毎日の仕事です。  
(長野県飯綱町・山浦 隆芳)

## 編集部より りんごを大きく美味しく育てる収穫までのご苦労はたいへんなものです。感謝!

「社会通信」ホームページのご案内  
この間は、一九八五年一月から一九八七年二月までの約三年をアップしました。向坂逸郎先生(一九八七年二月六日生—一九八五年一月二二日没)の蔵書が、大原社研(向坂文庫)に納められるまでの三年間です。「古典を読もう!」「向坂先生の本を読もう!」、連載「資本論を読む」等々、当時の様子が伝わってきます。是非ご活用を! ネットで「社会通信」と検索しご覧ください。